理学部付属植物園について

京大農学部三回生　坂本三和

私と理学部植物園

農学部や理学部の建物がある、北白川の京大北部キャンパス内に植物園があることをご存知でしょうか。

私がこの植物園を知ったのは、一回生の春休み、芦生で習ったトチ餅作りのアク抜きの作業に使う灰を探していたときのことでした。灰は芦生でもなかなか手に入りにくいと聞き、どうにか自分で探してみようと思ったのですが、京都市内では薪を手に入れるのも焚き火をするのもかなか難しいことでした。そんなとき、当時、理学部附属植物園の隣の建物で研究していた先輩が、植物園では枯れ枝などを集めて燃やしているようだからそこで頼んでみたら、と教えてくれました。

理学部附属植物園（以下、「理学部植物園」と略記）は、農学部の建物の東側にあります。植物園があるということはどこかで聞いたことがありましたが、ここがそうだったのか、と思いました。事情を説明し、灰を分けてほしいのですが、と職員の方にお願いしたところ、快く承諾してくださいました。火を焚くときには横で見せていただいたのですが、その時の職員の方が、今回インタビューをさせていただいた中島さんでした。

こうして、理学部植物園とのご縁は、植物園の本来の目的であろう、植物を観察すること以外のところから始まりました。全くもって、中島さんをはじめとする職員の方のご厚意がなければありえなかったものですが、このような面白い関わりをさせていただき、大変感謝しています。

その数日後、改めて理学部植物園を散策する機会があり、その森の広さと木々の大きさに驚かされました。池もあり、これならいろんな生き物がいるだろうと想像できました。そして、大学の中にこんないいところがあったのか、とうれしく思いました。

近頃思うことですが、街なかに住んでいても、自然にふれることは私にとってやはり魅力的です。道端の雑草も、下宿の大家さんの家の庭木も、私にとっては自然であり、それらを見て様々なことを考えたりしますが、理学部植物園を歩くときに感じる何ともいえないスケールの大きさは、なかなか味わえるものではないな、と思います。

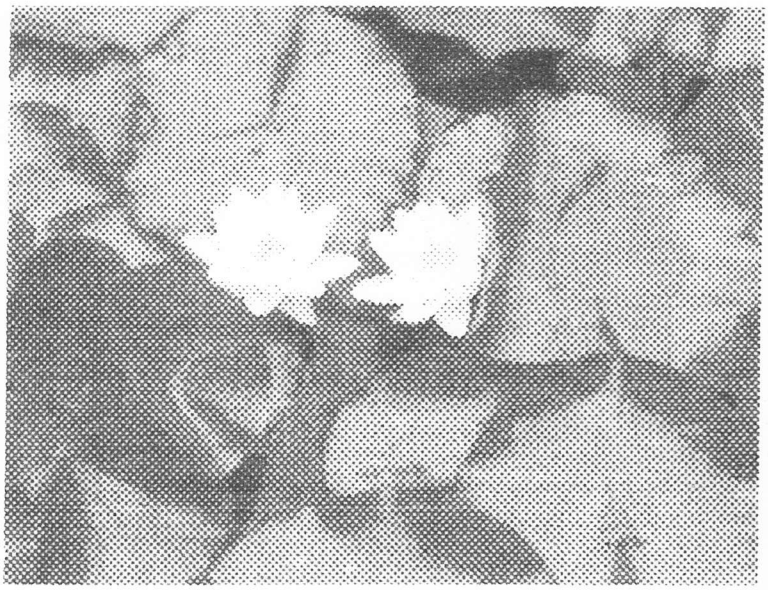
最初は、図太くも「身近な資源」として利用させていただいたわけですが、是非とも「身近な自然」として、理学部植物園をこれからも探検し、勉強させていただこうと思っています。

皆さんも、是非一度足を運んでみてください。（利用の案内は最後に）

理学部植物園の概要

理学部附属植物園が設立されたの

は、八十年前の大正十二年（一九二三年）のことです。以来、多くの研究者の研究や学生実習の身近なフィールドとして利用されてきました。学内のみならず、他大学や民間研究所などにおける研究の材料供給、さらには、都市の中の身近な自然としての社会的な役割も果たしてきました。緑豊かで多くの生物が生息するこの植物園の愛好者は多く、たくさんの人の憩いの場となっています。



理学部植物園は、もともと、単に珍しい植物を集めただけではなく、生態学的特徴をもったものにしようとの構想により作られており、園内には、大小二つの池や小山、岩山、洞穴などが人工的に配置されています。そして当初の意図通り、現在、そこに植えられた植物と、それが作る環境に生息する様々な生物（動物や菌類など）が互いに関連しながら生活しています。

また、植物の配置の仕方にも工夫が見られ、系統分類学上の類縁と、生態学的に見た植物集団の生育の両方を考慮した配置になっています。

植えられている植物には、国内外から集められた様々なものがあります。ヒマラヤ、東南アジア、琉球、中国から集められた植物や、メタセコイヤなどの外国産針葉樹、また、日本産でも比較的珍しい種が、現在大木に成長しています。総面積一万六五〇〇平方メートルの園内に、木本植物約五百種、草本植物とシダ植物を加えると、約千種の植物が植栽されています。

しかし、今…

しかし今、私達がこの植物園の恩恵にあずかることが難しくなるような出来事が起こっています。

昨年十一月末から今年一月にかけて、「環境整備事業」として、理学部の指示により理学部植物園の三十本ほどの樹木の伐採が行われました。事業を行った理由として、近隣の民家に落ち葉が多量に舞い込んで樋が詰まる、隣接する農学部の圃場が植物園の大木の陰になり、日光が当たらない、といった影響があるということが理由にあげられています。実際、このような影響があったことは事実ですが、どの木が影響しているのか、あるいは、伐採しなくても枝打ちにより解決することはできないのか、という検討が伐採前に十分に行われていなかったのではないかという疑問が浮上しています。また、近隣の住民からも、枝打ちは要求したが伐採までは頼んでいない、伐採はしないでほしい、という声が上がり、理学部には伐採に対する住民六十

人分の反対署名も提出されていました。さらに、植物園の職員や、植物園を利用して研究している研究者に対しても、十分な説明がなされていなかったということです。

伐採された樹木のうち、ヌマスギ、スズカケノキ、ノグルミは、相当な大木で、どれも二十メートル以上の高さがありました。これらは、理学部植物園と同じくらいの歴史を持っていました。この年月と、木を見守ってきた人の努力を考えると、伐られてしまったことがとても悔やまれます。現在、これらの木のあった跡はぽっかりと明るくなってしまっています。林床に直接日光が射しこむことになり、そこにすむ生物に大きな影響を与えます。また、木を伐採するには、その木を倒すのに邪魔にならないように周辺の木の枝をひもで縛ってまとめたり、切った木を運び出す道を作るために下草刈りなども行うことになるそうなので、これによる影響も考慮すべきだったと考えられます

今後も今回と同じような伐採が続けば、理学部植物園はいよいよ危機的な状態になります。研究や教育に支障をきたし、また、これが一番今の私には大きいですが、植物園の自然を楽しむことができなくなる危険性があります。

これら一連の問題を危惧して、今年三月に「京大植物園を考える会」が発足しました。植物園を、先人から委ねられた研究・教育の場、また緑を満喫できる憩いの場として存続させるため、多くの人々を交えて議論していくという設立趣旨に、学内外から多くの賛同署名が集まりました。そして五月十三日に、第一次集約分一一八七名分の署名を理学研究科長に提出しました。現在も署名の数は増え続けてお

り、六月六日現在、一五三八名分の署名が集まっています。現在、植物園を考える会では、植物園の学術的価値、学生や学外への教育的価値を再評価するため、過去に理学部植物園で行われた研究実績の収集、植栽植物のデータベース化、植物園の利用状況の調査や、一般の方も参加可能な観察会等を行っています。

実は、私はこの問題がきっかけで、ご無沙汰していた植物園と一年ぶりに再会することとなりました。なんとも皮肉なことですが、植物園と関わる多くの人に出会うなかで、植物園に対する興味は前より大きくなり、最近は頻繁に散歩に行くようになりました。最初に書いたように、植物園のことをもっと知りながら、自分も役に立てることを考えていきたいと思っています。

参考資料
「理学部附属植物園沿革」
「京都大学百年史」
「京大植物園を考える会」
六〇六－八七九九　京都市左京郵便局私書箱五番　京大植物園を考える会
http://members.tripod.co.jp/bgarden/
（署名用紙のダウンロード、観察会の案内、その他植物園に関する情報を載せています。）

理学部附属植物園のご案内

所在地…京都市左京区北白川追分町京都大学北部キャンパス内（東側通用門を入り、向かって左側に入り口があります）

開園時間…平日午前九時～午後五時

利用上の注意事項…

利用の際には、ご面倒でも利用願いを提出してください。書式は簡単なもので、記入時間はほとんどかかりません。植物園が多くの人々に利用されていることを大学当局に示すために重要ですのでご協力をお願いします。利用願いと提出用のポストは建物の東端の技官室のドアにかけられています。

園内では、多くの研究者によって様々な研究が行われています。道からそれて歩くことは、研究の妨げとなりますのでおやめください。

動植物の採集・持込は基本的に禁止です。教材用などで採集や持込みなどを行う必要がある場合は、利用願いに倣って手続きを行い、職員の方に相談してください。

園内は禁煙です。ごみなども捨てないでください。

園内には池や水槽など、危険な場所もあるので、小中学生以下の子供だけで出入りしないようにしてください。

今回の記事を書くにあたり、京大植物園を考える会の皆様に大変お世話になりました。ありがとうございました。